校長室だより～燦燦～ №５３６

１５０人

2022.4.12

時期は、だいぶずれているが、年賀状を書く際に思い浮かぶ顔の数はと聞かれたら、何と答えるだろうか。年賀状に関しては、一昔前とは感覚が違ってきているように感じる。

ある研究によると、人間の脳が大きくなったのは、群れが大きくなり、人間関係が複雑化してきた結果、家族間で通じる共感力以外のコミュニケーションの必要性が生じたからだそうである。そうしてできた集団の平均サイズは「１５０人程度」で、現代の狩猟採集民の平均的な村の規模とほぼ一致することが明らかになったとのことである。

これは、「年賀状を書く際に思い浮かぶ顔の数」であり、現代にも通じる数だそうだ。過去に喜怒哀楽を共にしており、困ったときに相談できる相手でもある。現代でも信頼できる仲間の数は１５０人以下であり、そういう社会に生きていることを自覚すべきだという。

一方で、現代は情報技術の発展で知識を外に出して分析させることが可能になった。その結果、長い年月をかけて得た１５０人という枠がなくなる危険性に陥っている。長年かけて培ってきた共感能力が必要なくなる方向にいっている。人と人の間にあった信頼関係が消失していき、１５０人が無くなっていく。

技術の発達によって、教育のもつ役割も変わっていくだろう。ネットに情報は入っている。現代の教育は、知識を与える役割だけではなくなる。子どもは学校に情報を得るために来るわけではない。未知の世界がどうなるか、皆と話し合うために来る。教員から教えてもらうために来る。そのためにも、実験やフィールドワークなどと共に、議論やディスカッションなど、生身のコミュニケーションを使い、共感力を一層重視した教育が必要となる。

年賀状で考えると、１５０人という数字には妥当性を感じる。確かに、過去に何らかの喜怒哀楽を共にした方に年賀状を出しているように思う。それも、日常的には会えない方である。それでも、気持ちは伝わるような気がしている方である。これを共感力というかどうかはわからないが、近いようにも思う。

世の中には、進んだ方がよいものと失ってはいけないものとがある。ネット社会やＩＣＴは進んだ方がよいものなのだろう。しかし、共感力が失われるのはどうであろうか。何か今以上に恐ろしい社会が待っているように思えてならない。学校の役割が変わっていく中で、何を大切していくべきなのかを考えていきたい。